



鞍を載せた馬
(児島虎次郎古陶器模写図) / 個人蔵

生誕 130 年記念展

そうごう 総合デザイナー児島虎次郎

～生活の芸術化をめざして～

7月16日(土)～10月10日(月)



縞模様の帆を張った3隻の帆船
(児島虎次郎古陶器模写図) / 個人蔵

休館日 毎週月曜日と7/19(火)、9/20(火)
(7/18、8/15、9/19、10/10は開館)

開館時間 9:30～17:00 (入館は16:30まで)

入館料 一般600円、高校生・大学生・65歳以上400円、
小・中学生200円 (市内小・中学生は、学校休業日は無料)

会場 成羽美術館一階絵画展示室、オリエント展示室など

主催 成羽美術館



木製丸盆「ペガサスに乗る人」
(児島虎次郎揮毫) / 個人蔵



コーヒーカップ&ソーサーとスプーン
(児島虎次郎デザイン) / 其樂堂蔵



西洋陶器コレクション
コーヒーカップ&ソーサー / 個人蔵

画家 児島虎次郎は、モネ、エル・グレコなどの名画だけでなく、各国の優れた工芸作品も収集していました。今展では、これまで紹介される機会の少なかった児島の近代西洋陶器を中心とする工芸コレクションや彼自身の木工、陶芸、デザインの仕事を紹介します。

それらはこれまで画家の「趣味」「余技」という観点でとらえられがちでしたが、そうした言葉で括りきれない、まだ解明されていない部分が多くあります。

遺された工芸資料を基に児島がどういった視点で収集活動を行っていたか、またそれらを基に何を成そうとしたのかを考えたいと思います。この機会にぜひご覧ください。

※会期中、一部展示替えを行います。

●関連イベント

8月7日(日) 13:30～15:00 記念講演会

「児島虎次郎と総合芸術
-油絵・デザイン・コレクションを読む」
講師：鈴木まどか氏(倉敷芸術科学大学教授)

9月3日(土) 13:30～14:30 記念講演会

「児島虎次郎の工芸へのまなざし」
講師：児島塊太郎氏(陶芸家、倉敷芸術科学大学教授)

※各イベントは参加無料ですが入館料が必要です。

高梁市成羽美術館

http://www.kibi.ne.jp/~n-museum/
Tel.0866(42)4455



地ろきすく

七十七

がぎゅうざん
臥牛山



牛が伏せた姿をした臥牛山を高倉町大瀬八長から望む

高梁の市街地の北にそびえているのが「臥牛山」(標高四八七m)です。高梁川の左岸、南へ流れ出る高梁川が臥牛山の山麓から河成段丘を形成して、その段丘上に高梁の市街地が広がっています。

小松山(約四二〇m)、前山(約三二〇m)の四つの峰に分かれていて、西側は急峻な崖で高梁川に落ち込み、北では佐与谷に急傾斜をなして南のすそは小高下谷川となっています。臥牛山の峰や尾根には中世から近世にかけての砦跡や城跡が残っていて、現在ほとんどが国の史跡指定地となっていて、昔から地元の人々は、「お城山」と呼んで親しんでいました。

臥牛山は、城の防備上樹木の伐採が行われず、国有林となったため、二〇〇種余りの樹林が保存され、アラカシ・ヤブツバキなどからなる照葉樹林とモミ・コナラ・シデ類からなる暖帯落葉樹林などが自然林で保存されていて、それにツル植物も見られ、原生林のような雰囲気をもっています。また、昆虫類も豊富な山で、四季折々の景色もすばらしい山なのです。

「備中松山城及其城下」を書いた信野友春先生は、その著書の中で「臥牛山の自然は真に雄であり美であり又雅である」と、そしてまた「何ぞや、七百年来の城地たりし歴史的背景を有すことである」と臥牛山の魅力を称えています。

牛山の峰(尾根)全体が、中世から近世にかけての「松山城」なのです。城の歴史を学ぶには、最も勉強になる場所なのです。

「松山城」は、承久の乱(一二二一)の後、新補地頭(鎌倉時代新たに補任した)として、有漢郷に相模国(神奈川県)から着任した秋庭三郎重信が延応元年(一二四〇)に北の大松山に砦を築いたのが創始だと伝えられています(「備中誌」)。その後、元弘元年(一一三三)高橋九郎左衛門宗康が城主として、後、南の小松山に山城を構えていたらしく、弟の二郎が居城していた(「備中府志」といわれます)。

この頃の砦は、よく分っていませんが、防御施設の痕跡が残っていて、当時の人々が大地に働きかけて築き上げた土木工事の跡が見られます。中世から江戸時代の初め頃にかけては、瓦や石垣は使用していませんが、曲輪(郭)と曲輪のまわりには、堀切りや土塁などを築き、削平地として人工急斜面の切岸をつくっているのです。このように中世の砦の縄張りを観察できるのです。

返され(備中兵乱)しましたが、この頃の「松山城」は小松山城に中心が移っていて、臥牛山一帯には大松山、天神の丸、相畑、佐内丸、太鼓の丸、小松山・馬酔木の丸など出丸や出城が設けられ、臥牛山全体が要塞の地になっていました(「備中兵乱記」・「中国兵乱記」)。また城主の居館であった御根小屋跡も石垣のみが残っていますが、松山城とともに建物や縄張りなどについてはよく分っていません。慶長二年(一六〇六)頃から小堀新助(正次)・作助(政二)父子は、松山城(近世の)と御根小屋の修築をしています。その後には天和元年(一六八一)水谷勝宗が松山城の大修築を行っています。今に残る二重の天守閣その他の櫓や石垣、番所跡などを残す近世の城跡、そして中世からの砦跡や堀切の跡など「臥牛山」は全山が広義の意味での「松山城」の歴史を語ってくれているのです。近年、教育委員会の発掘調査によって、天神の丸の天神社が明らかになってきて、臥牛山の頂上に守護神がいるという戦国時代の天道思想と天主の思想を思わせてくれるのです。

「臥牛山」という山名は、山の形から老牛が腹ばいになり、草を食べている姿(「老牛伏草山」)に似ている(「備中誌」ところから、その名で呼ばれるようになったといわれています)。

(文・松前俊洋さん)